

一粒の麦から

1992年の夏、NGOの関係で、私はネパールの子どもたちの現状を視察に行った。当時、男子バスケット部の顧問であった私は、その旨を部員たちに伝え、旅立った。

1週間後に帰国、再び体育館で子どもたちと会った。「先生、ネパールのおみやげは？」という子どもたちの声に「みんなが期待するようなおみやげはないかもしれないけれど、おみやげ話なら、たくさんあるよ!!」と私は答えた。暑い体育館の中、練習を終えた子どもたち。私は、昨日まで見てきたネパールの子どもたちの現実を語り始めた。

「それ、マジ？」

「本当にそんな生活をしている国があるの？」

「今、この時も？」

「だんだん子どもたちの表情がかわってくる」

「ストリートチルドレン 児童労働……」

知らない世界に出逢ったときの驚き、知らなかった現実

いる活動を認めてくださった方に出逢えた子どもたちは、嬉しそうに蓮田への遠征の日を楽しみにしていた。

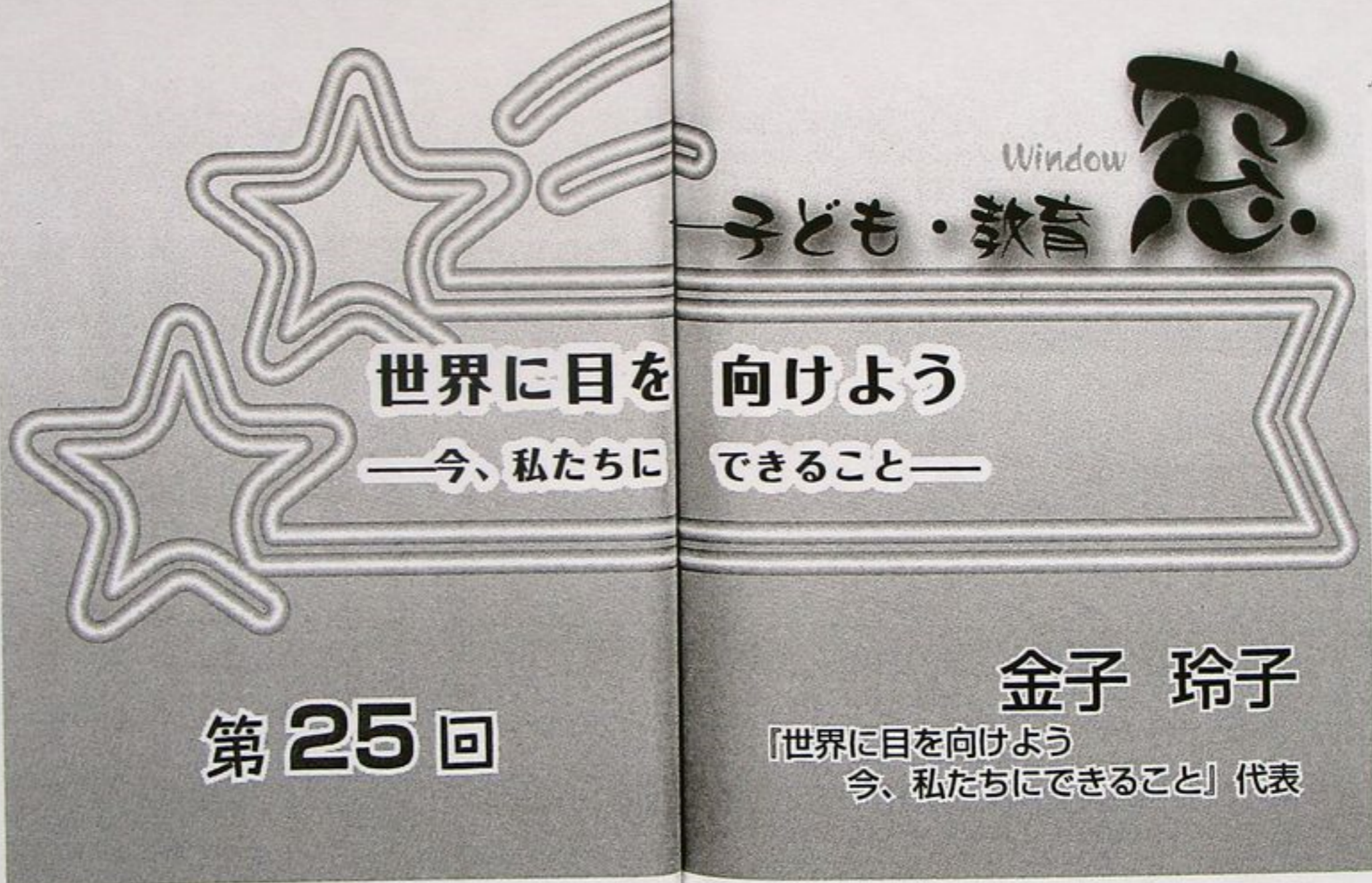
今思うと、練習試合で疲れていたはずなのに、よくこのような活動ができていたと思うばかりだ。いとしい子どもたち、私のほこりだ!!

練習試合の帰り、再びボールを傍らにおき、蓮田の地で写真の説明を生き生きとしている子どもたちの表情を見て、知ったこと、学んだことを伝える活動がこんなにも価値がある活動につながるのだと思ひ、ならば、きちんと系統的に学ばせたいという強い思いが、私の心に湧いてくるのを感じた。

その日から学校教育の中で、何か系統に学ばせることはできないか、資料探しを始めた。そこで出会ったのが、ユニセフの「地球のともだち」だった。世界の子どもたちのようすがテーマ毎にまとめられていて、わかりやすく手頃な分量で、しかも安価だった。

これだ!! と思った私はすぐにユニセフ本部へ電話をした。テスト週間で部活のない午後、新宿の大京町にあったユ

窓 Window 子ども・教育



世界に目を向けよう —今、私たちにできること—

金子 玲子

「世界に目を向けよう
今、私たちにできること」代表

第25回

と向き合った衝撃、知るとはこんなにすごいことだったのだと、私は強く感じた。子どもたちのまなざしと熱気で、ネパールの報告会は終わった。

するとその直後、子どもたちから「俺たちがこんなに驚いていたのだから、この話、ほかのやつらにも伝えようぜ!!」という声が上がった。この気持ちが源になり、今年で22年目を迎えた活動のスタートとなった。練習試合の帰り、ボールを傍らに置き、ジャージ姿での男子バスケットボール部員の「ネパールの子どもたちは今」写真展が始まった。

学んで伝えるボランティア

通りがかりのある男性が、子どもたちに熱心に何かをたずねている。蓮田の青少年育成会の方だそうで、このような子どもたちの活動にたいへん興味をもたれ、ぜひ、蓮田でもやってほしいとのこと。学校以外の場で写真展ができ、しかも自分たちのやって

ニセフ本部まで、40冊のテキストを買いに行ったあの日のわくわく感を昨日のことのように思い出される。

新年度、新しく導入された選択教科の枠をもらい、選択教科「ワールド・スタディーズ」を開講することができた。私にとっても開発教育や、

ワールドスタディーズという学びに出逢い、知ることの驚きや、目からうろこの現実にもっと学び、子どもたちと、学びを共有できる喜びでいっぱいだった。そうしたなかで、生徒会役員や、このような活動に興味を持った子どもたちが加わり、選択教科の発表の場が、学んだことを伝えるボランティア”となっていた。

Think Globally, Act Locally

人がたくさん通るから、多くの人に見てもらえるから……という理由で、はるばる浦和駅の方まで出かけていったのだが、この活動の目的と、パネルを持ち、はるばる浦和駅まで

出かけていく労力を考えると、何か違うように思えてきた。

大切なのは、地球規模で考え、身近な所から実行すること。
「そうだ、自分たちの生活している地域からだ」と、子どもたちと相談し、次の年から学区の公民館が、そして中学校のすぐ近くに建設された中核施設が、学びを伝えるボランティアの場となった。

緑に囲まれたローカルな場で、世界を知ろう。——「地雷ではなく花をください。」「世界が1000人の村だったら」の紙芝居、「ロバの話」「教室で知ろう世界の国々」海を越えての交流。——ネパールやチャド、カンボジアなどの子どもたちに絵や折り紙で友情を届けよう。

共に生きる仲間として、今私たちが抱えている問題や向き合っている課題について語り合おう「幸せって何だろう」「勉強って何だろう」「友だちって何だろう」など……。

身近にできる国際支援。——書き損じはがきや使用済み切手、ペットボトルキャップなどでの支援の仕組みの説明、そして来場者と共に未来づくりへのメッセージの交流などなど、地球上に共に生活している70億人の一人として、学びを伝えるボランティアは、夏休みのイベントとして定着していった。

We Are Partners For Our Better Future

ところが、この活動が軌道にのってきた2000年に私の異動があった。

「先生、ボランティア、どうなるの?」
「イベント、できなくなるの?」

卒業してからも、参加してくれている頼もしい生徒たちは心配していた。

私は生徒たちに

「イベントは、学習に基づくものだから、ただイベントだけやるというのは先生は賛成できないよ。」

と話した。すると生徒たちは、

「そうだね。イベントは楽しいけれど、ただのイベント屋にはなりたくないよね。」

「学校で、夜とか、学習会、できないのかな?」

「別の学校の先生が、元の学校に来て授業って、それは……私と子どもたちは考えた。」

「なら、公民館で学習会っていうのは?」

「なるほど。公民館ならいいね!!」

学区の公民館、そう、あの地域から発信しよう!!の源

になった公民館での学習会から始まった。

そして私も、子どもたち(といっても卒業生たち)も、地球市民の一人として、共によりよい未来づくりのパートナーとして学習会に参加した。年代も学校も立場も違う者たちが、同じ空の下で、共通の未来を作る仲間として集う学習会のスタイルができあがっていった。前半はユニセフのテキストやJICA資料から、後半は個々人の調査資料や考えから学びを広げたり深化させたり、フィールドワークの予定をたてたり……と、参加者全員が互いの学びのパートナーになっていった。

向き合って、つながり合って そして未来へ

あの体育館でのネパールの話から、気づけば22年。月2回の定例学習会と夏のイベントも定着し地域の方々から、「今年はいつですか? 切手、ためてますよ。」「来年も楽しみにしていますよ。」などとありがたい声に包まれ、現在にいたっている。今、ふり返ると、学校という場で出会った子どもたち、保護者の方々、子どもたちの思いや願いに寄り添い、応援してくださった地域の方々や、同窓生たち、すべての人たちに感謝したい。

今では、教職についた卒業生の教え子や、その弟、妹、さ

らに、「その友だちやイベントで共に、より良い未来」について考え合った仲間や出前授業で出会った仲間など、12歳から85歳までのさまざまな仲間が、年代や立場を越え、共通のより良い未来を作るパートナーとして活動している。

『教育』は『共有』『協育』『響育』そして『今日育』、共に協力し合い、心を響かせ、今日という日を共有できた仲間たちに感謝しあえる活動をこれからも継続させたい。子どもたちにとって一番身近なクラス。クラスづくりは未来づくり。——一人ひとりの子どもの願いや思いのつまったクラスを作る素晴らしさ。

違った価値観、考え方、感じ方の仲間が、ともに共通の未来を作っていく——さまざまな課題と向き合い、つながり合って、課題を解決していく体験が、未来づくりへとつながっていく。生徒と先生、保護者と学校、子どもと親、学校と地域、ひいては国と国、地球上の70億人の一人ひとりがより良い未来づくりかけがないパートナー。「世界に目を向け、自己と世界との関わりについて考えるきっかけ作り」「より良い社会作り、未来づくりのために、今、自分(達)のできることを考え、実践する」これらを羅針盤とし、さまざまな課題と向き合い、過去の方の思い、願いも含めて、つながり合って未来へと航海を続けたい。